

# 一般演題 (口演1)

## O1 心サルコイドーシスにおけるPET所見と血清ACE値の関連

○安田昌和, 岩永善高, 河村尚幸, 中村 貴, 宮崎俊一

近畿大学医学部 循環器内科

サルコイドーシスは全身性の炎症性疾患であり<sup>18</sup>F-FDG PETが局所炎症の存在診断に用いられる。一方血清ACE値は古くから疾患活動性と関係があると考えられている。本研究では、心サルコイドーシス症例においてPETによる局所炎症の検出と血清ACE値との関連の詳細を検討した。症例は平均63.8±9.0歳、女性が71%であった。診断時の血清ACE値は、肺門部リンパ節腫脹や心外病変の有無と正の相関があった(各P=0.02, P<0.01)。24例のPET施行患者において、肺門・縦隔リンパ節にFDG集積亢進のある症例では有意にACE値上昇(P=0.01)を認めたが、心筋にのみ異常集積を認める症例ではその変化は認めなかった。PETを連続的に施行した16症例の検討では3症例で心筋での集積増悪を認め、その全例で新たな心イベントを認めていた。しかしながら増悪時のACE値はサルコイドーシス診断時より全例で低下していた(変化率 -62±32%)。血清ACE値は肺門部・縦隔リ

ンパ節の炎症所見と関連するも、心サルコイドーシス自体のマーカーとしての有用性は低くFDG-PETの有用性とは対照的であると考えられた。

## O2 眼サルコイドーシスの眼内病変における*P.acnes*の検出

○後藤 浩<sup>1)</sup>, 馬詰朗比古<sup>1)</sup>, 江石義信<sup>2)</sup>

東京医大 眼科<sup>1)</sup>

東京医科歯科大 病理<sup>2)</sup>

【目的】サルコイドーシスの病因は不明であるが、疾患感受性因子や環境要因とともに、皮膚の常在菌である*Propionibacterium acnes* (*P. acnes*)の関与が注目されている。眼サルコイドーシスに生じた網膜前膜(epiretinal membrane, ERM)における肉芽腫炎症の有無、ならびに*P. acnes*の検出を試みたので報告する。

【方法】対象は東京医大病院眼科でERMによる視力低下の改善目的に硝子体手術を施行し、術中にERMを採取して病理組織学的検索が可能であった眼サルコイドーシス10例10眼(10検体)である。平均年齢は70.4±7.6歳、男性1例、女性9例、平均観察期間は54.1±31.4か月であった。採取したERMのパラフィン包埋切片を用い、*P. acnes*に対する特異的抗体であるPAB抗体による免疫染色を行った。

【結果】10検体中、ERM中に類上皮細胞肉芽腫が検出されたのは

4検体(40%)で、いずれも肉芽腫内にPAB抗体陽性所見が確認された。また、組織学的に明らかな肉芽腫の形成がみられなかった1検体でもPAB抗体陽性所見がみられた。術後は9例(90%)で2段階以上の視力向上が得られたが、ERM中の肉芽腫や*P. acnes*の有無と術前後の炎症や視機能の予後に有意な相関はなかった。

【結論】眼サルコイドーシスの眼内にみられる肉芽腫の形成に*P. acnes*が関与している可能性がある。

## O3 多施設共同による新規サルコイドーシス関連候補遺伝子の検索

○石原麻美<sup>1)</sup>, 目黒 明<sup>1)</sup>, 山口哲生<sup>2)</sup>, 四十坊典晴<sup>3)</sup>, 山口悦郎<sup>4)</sup>, 長井苑子<sup>5)</sup>, 千田金吾<sup>6)</sup>, 森本紳一郎<sup>7)</sup>, 生島一郎<sup>8)</sup>, 高瀬 博<sup>9)</sup>, 望月 學<sup>9)</sup>, 後藤 浩<sup>10)</sup>, 幸野敬子<sup>11)</sup>, 杉崎勝教<sup>12)</sup>, 岳中耐夫<sup>13)</sup>, 水木信久<sup>1)</sup>

横浜市大 眼科<sup>1)</sup>

JR東京総合病院 呼吸器内科<sup>2)</sup>

JR札幌病院 呼吸器内科<sup>3)</sup>

愛知医科大 呼吸器・アレルギー内科<sup>4)</sup>

京都健康管理研究会中央診療所<sup>5)</sup>

浜松医大 第二内科<sup>6)</sup>

藤田保健衛生大 循環器内科<sup>7)</sup>

日赤医療センター 呼吸器内科<sup>8)</sup>

東京医科歯科大 眼科<sup>9)</sup>

東京医大 眼科<sup>10)</sup>

幸野メディカルクリニック<sup>11)</sup>

西別府病院 内科<sup>12)</sup>

熊本市市民病院 内科<sup>13)</sup>

サルコイドーシスは多因子遺伝疾患であり、第6染色体上のHLAクラスII領域が、人種を超えて疾患に関連していることが知られている。近年、ゲノム上に存在する遺伝子多型を網羅的に解析するゲノムワイド関連解析(GWAS)がドイツと米国で施行され、第6、第10、第11、第12染色体上に新規の疾患関連候補遺伝子が報告された。我々は、新たな候補遺伝子の同定を行なうことを目的とし、日本人集団1586例を対象に、Illumina HumanOmni Expressを用いてGWASを施行した。第6染色体HLA-DR領域に最も強い相関が認められた。さらに、別の日本人集団1973例お

よびチェコ人集団535例を対象に、有意性を示したSNPsについてReplication studyを施行した。両人種に共通の疾患関連候補遺伝子として、第7染色体上にCC chemokine Ligand遺伝子を見出し、Imputationにてアミノ酸置換を伴うSNP(p=7.9×10<sup>-9</sup>)を同定した。また、候補遺伝子の機能解析により、リスクアレルを持つ個体では、受容体分子との相互作用による遺伝子の機能亢進が示唆された。